

＜書評＞

歴史学研究会・日本史研究会編
『慰安婦』問題を／から考える
——軍事性暴力と日常世界』

(岩波書店 2014年 278頁 ISBN: 978-4000610056 2,700円+税)

土野 瑞穂



今日の日本社会では、「慰安婦」問題を否定・攻撃する言動が日常的に繰り返されている。「慰安婦」問題についての歴史研究は着実に進展してきたにもかかわらず、である。こうした状況を前にして、歴史学研究会と日本史研究会による『慰安婦』問題を／から考える——軍事性暴力と日常世界』は、第一編と第二編における計10本の論考と4つのコラム、そして座談会の記録を通じて、「慰安婦」問題に対する否定的言動について多様な角度から論駁する。さらに、「慰安婦」の存在や強制性の有無を問うような視野狭窄した今日の議論のあり様に対して、様々な論点を提示することで議論の幅を広げ、過去から現在に至る日本社会全体を問うている。この試みは、昨今の「慰安婦」問題をめぐる現状に対して歴史学者らによる総力を挙げた抵抗であると同時に、「一国的な把握の傾向が強く、ジェンダー視点への関心が遅れていた」学会の「内省の所産」(p. x)という性格をもち、研究のみならず運動・教育領域への貢献も大きいと言えよう。

本書のオリジナリティは、「慰安婦」に関する否定的かつ恣意的な解釈に対する反論の「先」にある。すなわち、タイトルにもあるように『慰安婦』問題を考えるにとどまらず、『慰安婦』問題から考えるという視点が導入されている点である。後者の視点から、「慰安婦」問題と日常世界とのかかわりに目をむけ、現在の日本の社会状況、ジェンダー意識、マスメディアや歴史教育のあり様についても検証していることが、従来の研究にはない特徴となっている。

さらに副題にある「軍事性暴力と日常世界」との連関から「慰安婦」問題を捉える意義は二つある。第一に、「慰安婦」問題に対する認識を、「戦時中の特殊な出来事」から「日常から生まれる出来事」へと転換させたことである。「軍事性暴力」という概念は、暴力を内在させた存在である「軍隊」との関係の中で性暴力を捉えるため、戦時のみならず、平時における軍隊による性暴力とそれが生み出される社会構造に我々の目を向けさせる。シンシア・エンロー (Cynthia Enloe) は、軍事主義の台頭や戦争の勃発はある日突然起こるのではなく、日々の生活のなかで「男らしさ」「女らしさ」が巧妙に活用されながら、「何かが徐々に、制度としての軍隊や軍事主義的基準に統制されたり、依拠したり、そこからその価値をひきだしたりするようになっていくプロセス」(エンロー2000=2006, p. 218, 傍点著者)、すなわち「軍事化」を経てもたらされると論じた。「軍事化」をそのように理解するならば、本書の第一編「軍事性暴力から日常世界へ／日常世界から軍事性暴力へ」は、「慰安婦」問題を「軍事化」という共通項でつないで俯瞰するものといえる。

宋連玉論文は、植民地化の進行と総動員体制下で、日本人と圧倒的な差をもって生み出された就学率の低さとその男女間格差により、朝鮮女性たちが「性風俗」産業やインフォーマルセクター、そして「慰安所」へと追いやられる過程を描く(第1章『慰安婦』問題から植民地世界の日常へ)。また内田雅

克論文は、日清・日露戦争からアジア・太平洋戦争期にかけての軍事化プロセスで「日本男子」がウィークネス・フォビアとミソジニーを増長させながら男性性を内面化していった過程を考察し、ホモソーシャルな連帯に潜む強迫観念と脅えが、より劣位に置かれた者としてのアジア女性への蔑視に化していったことを指摘する（第7章「日本人男性の『男性性』——軍事化プロセスにおける『少年』を捉えて」）。

これらの論考からみえてくるものは、日本軍「慰安婦」問題にとどまらない、「軍隊」「戦争」「植民地」「男らしさ」が生み出す性暴力の構造そのものである。永原陽子論文は、19世紀以降の欧米の軍隊が植民地で制度化した管理売春は「墮落」した「劣等」な植民地住民から兵士と植民者を守るための「人種・ジェンダー観に裏付けられた住民管理そのものと不可分の関係」（p. 68）であったと論じ、このことが容易に管理売春を強制売春・強かに転じさせたのであり、そこに日本軍「慰安婦」との共通性を指摘する（第4章『「慰安婦」の比較史に向けて』）。松原宏之論文は、アメリカ兵の性欲をめぐる力学の歴史的考察から、男性兵士の欲望が「普通」でも「自然」でもないことを明らかにしている。そして性規範の形成と適用のあり様は国・時代・場所によって異なることを示しつつも、軍による男性性の扱いが暴力となって表出する点では日本軍もアメリカ軍も変わりがないと指摘する（第6章「兵士の性欲、国民の矜持——20世紀初頭アメリカにおける市民の資質をめぐって」）。

以上の論考が提示するのは、「慰安婦」問題を「どこの軍隊もやっている」こととして追認せずに軍隊というものが孕む暴力性を批判するためには、「慰安婦」問題の「特殊性」と「普遍性」の両方に目を向ける必要があるという点である。

第二の意義は、「慰安婦」が生み出される社会構造を日常世界から読み解くことで、「慰安婦」の「自発性」を強調する議論への反駁を可能にしている点である。日本政府の責任を否定する者がしばしば日本人「慰安婦」の存在を取り上げ、彼女たちは「自発的に慰安婦となった」「慰安所では好待遇を受けて楽しかったと発言している」などと主張するなど、「慰安婦」に関する研究の中で、日本人「慰安婦」については運動・研究両面において立ち遅れていた（藤目 2015、p. 54）。

こうした研究状況の中で、小野沢あかね論文は、当時の公文書に加えて手記や先行研究から、もともと「売春」をしていた日本人の芸妓・娼妓・酌婦で「慰安婦」となった女性たちのライフヒストリーを抽出・分析した、日本人「慰安婦」の本格的な研究である（第5章「芸妓・娼妓・酌婦から見た戦時体制——日本人『慰安婦』問題とは何か」）。同論文では、「慰安婦」になる以前と以後の女性たちの暮らしがあまりにも過酷であったこと、日本人「慰安婦」の徴集は近代日本社会に広く存在していた人身売買の慣習があったから行われたこと、前借金で縛られた芸妓らは「お国のために」「慰安婦」となることで「同じ日本人」として扱われることを期待し、現状を脱しようとしたことを明らかにした。すなわち、彼女たちの「選択」は「自由意思」からほど遠かったのである。「慰安婦」問題における「構造と主体」の関係を解き明かした小野沢論文と先の宋論文から浮かび上がるのは、「慰安婦」となること以外に生きる術を奪われた女性たちの姿と社会構造であり、さらには本国内、本国と植民地、そして植民地内における、上・中流層女性と最下層の女性との分断である。日本軍は、そうした女性間の分断を利用することで「男らしさ」を特権化しながら軍事化を進め、「大東亜戦争」を遂行したのである。女性間の差異の形成・維持によって進行する軍事化に組み込まれ、軍の周辺に配置された女性たちが真っ先に「男らしさ」を体現させられる被害者・犠牲者となるという構図は、沖縄や韓国、フィリピン等における米軍基周辺で性産業に従事する貧困女性への性暴力にみるように、今日まで続いている。ゆえに、「軍事性暴力と日常世界」との連関に着目する本書の含意は、軍事性暴力は、「当時」の日常生活だけでなく、

私たちが生きる「現在」の日常世界とも深く結びついているということである。

最後に、2015年12月28日の日韓両政府による「慰安婦」問題の「妥結」を踏まえた上で、本書の示唆を検討したい。今回の「妥結」は、日本政府が「女性のためのアジア平和国民基金」の発足というかたちで「慰安婦」問題の解決を図ろうとした1995年当時と同様に、被害者不在で「合意」に至ったという印象が拭えない。さらにその「合意」内容には真相究明や歴史教育が含まれていないため、第二編「現代社会、歴史学、歴史教育——いまに続く植民地主義」で藤永壯論文が示したような、1990年代半ば以降の歴史修正主義の台頭によって醸成されてきた、「慰安婦」問題に対する責任転嫁と被害妄想に囚われた主張・認識はそのまま日本社会に沈殿することになる（第8章『『失われた20年』の『慰安婦』論争——終わらない植民地主義』）。それを防ぐことができるのは、小川輝充論文が自身の経験をもとに提示した、当事者への共感から学ぶ者の主体性を喚起させて「慰安婦」問題に対して深い認識をもたらすような教育の実践であろう（第9章「1990年代からの歴史教育論争——学校教育は『慰安婦』問題にいかに向き合ってきたか」）。

「慰安婦」問題に関して、「ネトウヨ」と称される人々の極右的な主張も含めた保守的言説が日本社会で影響力を強める状況の中で、元「慰安婦」女性個々の姿・顔を描き出すことが困難になっている。本書が提示する次なる課題は、日本と朝鮮以外も射程に入れた上で、個々の女性たちが「慰安婦」とさせられたミクロなジェンダー関係とマクロな国際関係を架橋する視座で、「大日本帝国」という空間内での、日常世界と軍事性暴力との連関を解明することである。その試みは、永原が言うように、「慰安婦」に関する研究を急速に進展させてきた日本・東アジアの歴史学が、世界の歴史学やジェンダー研究、平和研究を牽引することにつながるだろう。

【参考文献】

- 藤目ゆき『「慰安婦」問題の本質——公娼制度と日本人「慰安婦」の不可視化』白澤社、2015年。
 Enloe, Cynthia. *Maneuvers: The International Politics of Militarizing Women's Lives*. Berkeley: University of California Press, 2000. (シンシア・エンロー『策略——女性を軍事化する国際政治』上野千鶴子、佐藤文香訳、岩波書店、2006年)。

(つちの・みずほ／お茶の水女子大学リサーチフェロー)